

しかし、元田の自然は分なり変りてきてゐる。道隆をはじめ、集澤、水田、山野の姿、対岸竹ノ原の山崩れ、井崎川の護岸工事など、もし百年前の人々が生きていてこの姿を見たら、どんな感慨にふけることだらうか。

研究

「徐文長文集」について

一 明石秋室の愛読した本

羽柴

弘

九州大学の上尾助教は、去る七月、私に四冊の本をお貸し下さった。それがこの本である。

開いて見たら和書でなく、中国の漢文の、木版印刷本であった。一瞬、私は「佐伯文庫」本ではないかと思つたが、どこにも「佐伯文庫」の捺印がなく、そのかわりに「明石如磨寄贈」の朱印が強く押され、表紙裏に小判型の「九州帝国大学図書館」の蔵書印があり、「昭和十九年三月三十一日、第一六一一九一號」と、登録の文字が書きこまれている。つまりこの四冊の本は、九大図書館の所蔵本で、今春、中島子玉と明石秋室について調査にこられた上尾先生が、関連深いこの本を、格別のお計らいで貸して下さったものである。

この四冊の「徐文長文集」は、お隣り中国の本版本で、印刷文字面はきわめて鮮麗であるが、惜しいことに用紙が薄く、すでに折目のきれているところがかなり多く、ページをめくるのに少々苦勞した。

重ねて京子が全部漢文、割点(返り点送りかな)の全くない、いわゆる白文である。たとえは、第一冊のはじめに述べている徐文長の伝記の冒頭はこうである。

徐渭字文長山陰人幼孤性絶警敏九歲能属文——
私は、乏しきをかえり及ず、こころ読んで見た。
徐渭、字ハ文長、山陰ノ人ナリ。幼ニシテ孤、性絶
エテ警敏、九歲能ク文ヲ属ス——

内容は悉く詩文である。四言・五言・七言の古詩・律詩・排律・絶句と、大部分は詩であるが、なお若干の贊銘・記・碑・伝・墓誌銘・祭文などに及び、徐文長の代表的主要詩文を網羅して見たと見た。

私は、そこで鶴城高校の図書館にしかけて人名辞典や中国文学史などによって、徐文長についてしらべて見たが、要約すると、次のようである。

徐渭(一五二一—一五九三) 中国、明代の文人、浙江山陰に

生まれ、字は文長、天地山人、青藤道士と号し、田水月とも署名した。その学才は幼少の頃から聞こえ、詩は李白、李賀の間、文は蘇軾の流れを汲む。天才超拔、詩文にすぐれ、書画に巧みであった。総督胡宗憲の幕客となり、兵謀に参謀して功あり。著書に「徐文長文集」「李長吉詩集批注」等二十数種に達す。

ところで、この徐文長の詩文は、今まで私など全く接したことがなく、高校の漢文の本などにも見かけたことのないほど、馴染はきわめてうすかった。しかし前記(側点で示す)李賀(字ハ長吉)は、明石秋室が傾倒した晩唐の詩人である。倏然この文集は私にとって身近なものとなった。

依伯藩最高の常識者明石秋室が、その当時、どのような見識のもとに、二百年以上も前の人、明国の徐渭の文学をえらび、どういふ手づるでこの中国からの舶載本(輸入書)を手に入れたものであるうか、いずれにしても李賀、徐渭、秋室のつながりに、私は秋室の面目の躍如

